

P1-030

学童期の健康行動に影響を与える要因の検討 ～碧南市生活習慣病若年化対策事業における生活習慣アンケートの縦断分析から～

藤井 琴弓¹⁾、山崎 嘉久²⁾愛知県碧南市健康推進部健康課（碧南市保健センター）¹⁾、
あいち小児保健医療総合センター²⁾

【目的】生活習慣病若年化対策事業は昭和 63 年度から、現在の学校保健安全法による身体測定・尿検査に血圧測定や血液検査などを加えて、学校で実施している。特徴は、小学 4 年（以下、小 4）と中学 1 年（以下、中 1）の全員を対象に、空腹時採血を各学校で実施し、参加率が 90%を超えていること。もう 1 つは、健診後の保健指導（教室）を市が中心となって、学校と協力をして実施していることである。平成 20 年度に事業の内容を変更してから、小 4 は 8000 人、中 1 は 6000 人を超すデータが蓄積された。これまでの単純な集計では、教室前後の短期的な比較では効果があったが、小 4 から中 1 という中期的な効果を具体的に数値化することはできていないため、今回この事業で検査と合わせて行っている生活習慣アンケートの問診項目の変化の分析をした。

【方法】対象は、H26・27 年度に小 4 で健診に参加し、かつ H29・30 年度に中 1 でも参加した 1121 名の検査結果および生活習慣に関するアンケートを、4 群に分けて、SPSS を用いてカイ 2 乗検定を行った。4 群は、小 4・中 1 で保健指導の対象でなかった者を健康維持群とし、改善群は小 4 で保健指導対象であったが中 1 で対象でなかった者。悪化群は、小 4 で保健指導対象でなかったが中 1 で対象となった者。リスク維持群は、小 4・中 1 ともに保健指導の対象であった者。

【結果】背景因子と判定変化、小 4 での保健指導への参加と判定変化に関連は認められなかった。関連が認められたのは、家族歴では、父・母の糖尿病、祖父母の狭心症・高脂血症・糖尿病のり患。食習慣・歯科では、小 4 は食べる速さ、よく噛んで食べる、1 日の歯磨き回数。中 1 では、規則正しい食事、朝の孤食、歯磨き粉の使用回数。生活リズムは中 1 の休日の睡眠時間のみ。また、小 4 では平日のテレビ・DVD の視聴時間とパソコン・タブレットの使用時間。中 1 では、休日のテレビ等の視聴時間であった。

【まとめ】(1) 家族歴からも家族の生活習慣が子どもに強く影響していることと、この先ハイリスクグループへの介入の必要性が確認された。(2) 食事や運動、生活リズム等の結果から、規則正しい生活習慣が身につくよう、受診者全員にアプローチの大切さが確認できた。(3) 小・中学生の健康づくりの視点から、早寝早起き、朝ごはんはテレビやパソコン等の影響も保健指導等に組み入れることの重要性が示された。

P1-031

保健医療専門職を目指す大学生が小児医療施設でのボランティア活動より得た経験

石川 紀子、西野 郁子

千葉県立保健医療大学 健康科学部 看護学科

【目的】保健医療専門職の養成を行う A 大学では、入院している子どものきょうだい児への遊びボランティア活動を学生と行っている。本研究では、保健医療専門職を目指す大学生が小児医療施設におけるボランティア活動に参加したことで得た経験や学びを明らかにし、在学中にボランティア活動を経験することの意義や効果を検討することを目的とした。

【方法】A 大学に在学時、小児医療施設でのボランティア活動に参加した経験をもつ卒業生で、研究協力の得られた 9 名を対象とした。活動に参加した理由、活動を通じて得た経験や学び、活動で得た経験が現在の医療職としての活動に与えている影響について半構成面接を実施した。調査は研究者の所属機関の倫理審査で承認を得て行った。

【結果】対象者となった卒業生の現在の職種は、看護職 6 名（看護師、保健師、助産師）、理学療法士 3 名で、在学時のボランティア活動参加の回数は 4～22 回であった。活動に参加した理由は、子どもと関わりたい、きょうだいのケアに関わりたい、ボランティアに関心がある、医療に関わるボランティアをしたい、病院という環境を知りたいというものであった。ボランティア活動を通じた経験からの学びでは、子どもという対象への興味・関心の高まりや理解につながったこと、きょうだい児や入院児との遊びを通じて子どもの遊びや子どもとの関わり方を学ぶことができたこと、きょうだいを預かる場の必要性や子どもが我慢している心理状態についても学べたことが挙げられた。また、小児医療施設での活動に参加することで、小児医療施設の現状や人的環境、子どもの家族の状況や支援の必要性についても学ぶことができた振り返っていた。活動で得た経験が現在の医療従事者としての活動に与えている影響については、子どもという対象者に対して積極的な関わりができるようになったことが挙げられた。また小児医療とは異なる職場においても、幅広い視点から対象者を理解しようとする姿勢や、対象者の特性に合わせて関わろうとする姿勢をもつことができていたこと、対象者の家族に対する関心をもつことができていたことが挙げられた。

【考察】大学在学中の小児医療施設でのボランティア活動の経験から、子どもの特徴や家族が置かれている状況について学ぶことができ、医療従事者となった現在の職場での対象者理解の広がりや家族支援にも活かされていると考えられた。